

志報

四十六

天中

文 登		
數冊	号即	號番
五二	一	
學校	縣中	滋賀

85

Z10.47  
87  
Vol 45

新刊吾妻鏡卷第四十六

建長八年丙辰

十月五日為康元年

正月六日

天顏快晴 有境餼相州御之儀相州

奧羽已下人々著布衣出仕各候庭上如例

前右馬權頭 武藏守 遠江守

尾張前司 越後守 相模式部大夫

中務權太輔 相州右近大夫將監

越後右馬助 刑部少輔 遠江右馬助

陸奥弥四郎 同六郎 同七郎

足利二郎 同三郎 駿河四郎

尾張二郎 武藏四郎 同三郎



遠江太郎 越後又太郎 遠江七郎

備前三郎 畠山上野前司 長井太郎

秋田城介 遠江太郎 同三郎

長井三郎藏人 同判官代 出羽前司

和泉前司 足利上總三郎 安藝前司

小山出羽前司 越中前司 大藏權少輔

若槻伊豆前司 那波左近大夫 前太宰少貳

新田三河守 攝津大隅前司 三浦介

周防守 日向守 攝津大隅守

上總介 武藏右衛門尉

上野右衛門尉 大曾祢孫二郎右衛門尉

隱岐三郎右衛門尉 小野寺四郎左衛門尉

大須賀二郎左衛門尉 伊賀二郎左衛門尉

筑前二郎左衛門尉 七郎左衛門尉

肥後二郎左衛門尉 縫殿頭

和泉次郎左衛門尉 遠江三郎左衛門尉

式部太郎左衛門尉 鎌田三郎左衛門尉

小野寺新衛門尉 鎌田次郎兵衛尉

肥後々藤次 伯耆左衛門三郎

遠江十郎左衛門尉 武藤左近將監

上總太郎左衛門尉 大曾祢二郎兵衛尉

武藤左近將監 大曾祢五郎兵衛尉

出羽三郎 内藤權頭 伊勢二郎左衛門尉

土屋新三郎

土屋新三郎

鎌田新左衛門尉

平賀新三郎

今日雖申時尅將軍家依御歡樂被垂御簾御劍進  
入簾中御劍前右馬權頭御弓箭武州朝直御行騰  
出羽前司行義

一御馬 陸與弥四郎時義 同六郎兵衛尉義政

二御馬 火會祢次郎左衛門尉盛經

三御馬 同五郎兵衛尉

三御馬 三浦三郎左衛門尉叅盛

四御馬 同十郎左衛門尉頼連

四御馬 薩摩七郎左衛門尉祐能

五御馬 同八郎祐氏

五御馬 足利次郎兼氏

二日 甲午 晴境飯真別沙汰今日將軍家出御南面

主御門中納言直方彼上御簾御叙武藏守朝直

御弓箭刑部少輔教時御行騰香秋田城介泰盛

一御馬 尾張次郎公時 同三郎頼章

二御馬 肥後次郎兵衛尉為時 伊東三郎

三御馬 三浦遠江三郎左衛門尉奉盛

四御馬 同五郎左衛門尉

四御馬 上野太郎景經 梶原左衛門太郎景基

五御馬 陸與弥四郎時茂 同七郎業時

三日 乙未 晴境飯足利三郎利氏御簾黃門御叙

越後守實時御調度下野前司泰經御行騰和泉前

司行方

一御馬 越後又太郎 大平左衛門太郎

二御馬 遠江三郎左衛門尉泰盛

三御馬 同十郎左衛門尉頼連

三御馬 梶原上野太郎景經

同左衛門三郎景氏

四御馬 尾藤次郎兵衛尉 備前左衛門三郎

五御馬 足利次郎兼氏 新田次郎

丙申 早且相州披覽御的始射手交名給

凡次一人也然勿參否不一准所謂申領狀  
工藤八郎四郎

布施弥三郎 里本新共衛尉

平嶋弥五郎 摸溝七郎五郎

多賀谷弥五郎 小嶋又二郎

藤澤左近將監 大瀬二郎左衛門尉

平新左衛門三郎 海野矢四郎

澁谷三郎大衛門太郎 南條兵衛六郎

申障

上野十郎朝村 遠江十郎左衛門尉

出羽七郎 小笠原孝次郎

南條八郎兵衛尉 河野五郎兵衛尉行真

南條左衛門二郎 諏方四郎兵衛尉

以前故障章之中於朝村行真者無恩許可參勤之

由於殿中真相觸之被召領狀奉詔是俵堪能之越人也  
五日齋了酉夫晴將軍家依可有御行始干相州  
御亭今日出仕衆八十五人之文名披覽之就御點  
以三十八人為供奉此事以前兩三年者相州令撰  
沙汰之給而於今者可被計下旨就令申之給今年  
始及御點亭午之後出御  
供奉人布衣下指

前右馬權頭

武藏守朝直

尾張前司持章

遠江前司時直

越後守實時

相摸右近大夫持監時定

刑部少輔教持

尾張次郎公時

陸奥守四郎時茂

同六郎義政

同七郎業時

武藏五郎晴忠

遠江太郎清時

中務權大輔家氏

足利次郎兼氏

同三郎利氏

長井太郎時秀

出羽前司行義

前大藏權少輔朝廣

秋田城介泰盛

下野前司泰經

和泉前司行方

參河前司賴氏

大隅前司忠時

縫殿頭師連

遠江守光盛

上總介長兼

式部太郎左衛門尉光政

大曾祢弥四郎左衛門尉盛種

小野寺四郎左衛門尉通時

武藤左衛門尉景頼 大同二郎左衛門尉頼泰

出羽三郎行資 和泉二郎左衛門尉行章

隱岐三郎左衛門尉行氏

薩摩七郎左衛門尉祐能

鎌田三郎左衛門尉義氏

筑前次郎左衛門尉行頼

御引出物如例 御劔中務權大輔家式砂金

刑部少輔教時 羽秋田城介茶盛

一御馬 尾張次郎公時

誠方三郎左衛門尉盛經

二御馬 遠江太田清時 大同次郎時通

三御馬 筑前次郎左衛門尉行頼 大同三郎行實

七日 己亥 來十一日為年始御神拜依可有御

參鶴置八幡官被催供奉人各著布衣可參勤由云

九日 辛丑 於由比濱被撰御的射手左右各以

九人二五度被試之

一番 上野十郎朝村 早河次郎太郎

二番 畠本新兵衛尉 平嶋弥五郎

三番 河野五郎兵衛尉 工藤八郎四郎

四番 布施三郎 橫溝七郎五郎

五番 多賀谷弥五郎 藤澤左近將監

六番 大瀬三郎左衛門尉 平新左衛門三郎

七番 小嶋弥二郎 南条兵衛六郎

八者 澁谷左衛門太郎 海野夫四郎

十日 壬寅天晴 於相州御亭有評定始前右典

廐已下著布衣出仕盃酌如例御樂官始明日心定

之間被催供奉人是著直垂令帶叙可奉仕之由云

太略進奉伊勢次郎左衛門尉者申所勞之由遠江

三郎左衛門尉者遂不申是非左右云御的始可為

來十三日仍昨日射手十八人之中叶清撰分十人

所被番五手也相觸之處各進奉云其狀書據

右各來十三日如法卯剋以前可被參東御門陣

參屋之狀依仰所迴如件 人各參市方已無由云

建長八年正月十日 參市方已無由云

十一日 癸卯天晴 辰剋太白見辰方終日出見

之經天也未剋將軍家御樂御樂正宮

先御車 三藏院方 女侍上給二枚九

大曾祿孫五郎兵衛尉 上總太郎左衛門尉

大曾祿左衛門太郎長賴 土肥四郎實經

隱岐二郎左衛門尉時清 同五郎朝忠

大見肥後四郎兵衛尉行定 示文取公新

山内藤内左衛門三郎通廣 與次山取朝興

鎌田三郎左衛門尉 平賀新三郎惟持

土屋孫三郎 鎌田二郎兵衛尉行俊

肥後孫藤次 御門保次

以上著直垂帶劔候御車左右

御劔役入 御門保次



前右馬權頭

御調度役

遠波三郎左衛門尉行氏

御後

刑部少輔教時

越後右馬助時親

同四郎業時

武藏四郎時仲

遠江太郎清時

備前三郎長賴

足利三郎利氏

小山出羽前司長村

相摸式部大夫時弘

陸奥四郎時茂

尾張次郎公時

同五郎時忠

駿河四郎兼時

中務大輔家氏

足利上總三郎滿氏

三河前司賴氏

秋田城介泰盛

長井太郎時秀

遠江守光盛

上総介長家

大曾祢二郎左衛門尉盛經

式部太郎左衛門尉光政

肥後二郎左衛門尉為時

薩摩七郎左衛門尉祐能

和泉二郎左衛門尉行章

十二月 甲辰天晴

卯時尅於相州野殿下部男

一入寢死可為狀簡日穢云

十三日 乙巳天晴

御射始射手十人二五度始

之云

一番 早河次郎太郎祐泰 平嶋弥五郎助經

二番 横溝七郎五郎忠光 多賀谷弥五郎景茂

三番 河野五郎兵衛尉行真

工藤八郎四郎朝高

四番 藤澤左近將監時親

澁谷左衛門太郎朝重

五番 海野次四郎資氏 肥本新兵衛尉重方

十四日 丙午霽 奥州被燬臺所前右典厩武州

已下評定衆等同以恭候奥州被申云相州依三十

箇日穢氣不衆而昨朝諸人不知予細而被入彼亭

間已雖倉中觸穢也然者被出仕之條有何難哉云

仍以内藏權頭親家被召參河守教隆有御委之處

彼真人申云於觸穢者吉事無憚至重輕服者吉事

有憚御出仕更不可有憚云仍以行義可令出仕給

之由被申相州云

十五日 丁未天晴 就仰今日相州令出仕給

十六日 戊申 越前兵庫助政宗<sup>年五</sup>二番引付

右筆之辭

十七日 己酉 日向守祐泰有愁申事是將軍家

今年始被加御合點被計供奉人數事御之處上中

旬間已雖有兩度御出數輩五位六位之中一身漏

御點之條若有殊予細歟由周章云内々申相州何

事有之哉之由有仰子屬女房言上只自然漏畢歟  
之旨被仰出云

今月二月小

十九日 辛巳天晴 丑越雨降今日將軍象被始  
二所御精進

廿四日 丙戌霽 右近大夫將監時定朝臣為二  
所奉幣御使進發

廿九日 辛卯 自昨大雨降午尅洪水雷電二日  
依雨及今日 二所奉幣御使時定朝臣歸衆候

三月大

九日 庚子天晴 入夜雨降於鶴罷八幡宮被行  
仁王會

十一日 壬寅天晴 宋刻雷鳴小雨酉刻與州辭

職令落飭給法名觀覽

十六日 丁未天晴 伊賀前司時家大倉家以東

三町餘人家皆燒亡又相州新不例云

廿七日 戊午霽 左近大夫將監長時朝臣自京

都下著去廿日辭六波羅釐務出京云

廿八日 辛酉天晴 今日前右馬權頭為真州出家

替連暑

四月小

十日 辛未天晴 武列前刺史禪室後室禪尼依

不食所勞逝去 年七十 相州依此事著服五十日御

服服云

十三日 甲戌天晴 未刻雨降陸奧然四郎時茂  
主年十六為供六波羅上洛外  
十四日 辛乙亥霽 與州奉權事之後有政所始之  
儀  
十八日 己卯 駿河藏人二郎入小侍番張二番  
云 辛酉天晴 今日前夜  
廿七日 戊子天晴 今日陸奧於四郎入洛著六  
波羅北亭云 六番  
廿九日 庚寅天晴 三番引付頭入等事有其沙  
汰今日沙定之所謂武藏守朝直為一番引付頭前  
尾張守晴章為二番頭越後守實時三番頭  
十一 五月小 未

一日 辛卯 引付等始行之云

五日 乙未 於御所內有和歌御會

六月小 與大道夜討強盜蜂起成往反旅入

二日 辛酉 與大道夜討強盜蜂起成往反旅入

之煩仍此間度 有沙汰可致警固之旨今日被  
仰付于彼路次地頭等所謂

小山出羽前司 守都宮下野前司

阿波前司 周防五郎兵衛尉

武家余三跡 壹岐六郎左衛門尉

同七郎左衛門尉 出羽四郎左衛門尉

陸奧留守兵衛尉 官城右衛門尉

和賀三郎兵衛尉 同五郎左衛門尉

葦野地頭兵衛尉

福源小太郎

澁江太郎兵衛尉

伊古宇又二郎

平間江地頭

清久右衛門二郎

鳩井兵衛尉跡

那須肥前之司

宇都宮五郎兵衛尉

岩手左衛門太郎

岩手二郎

夫古宇右衛門二郎

伊古宇上女四人

御教書云

與大道夜討強盜事近年為蜂起之由有其間是偏地頭沙汰人等無沙汰之所致也早所領內宿正之居置直人可警固只有如然之輩者不嫌自他領不可見隱之由被召住人等起請文可被致其

沙汰若尚背御下知之旨令緩息者殊可有御沙

汰之狀依仰執達如件

建長八年六月二日

某殿

五月甲子 於御教書違背之咎者為令召可注

進所領之由可下知之旨所被相觸五方引付也

七日 丙寅 兩降凡今年大雨洪水殆越例年寒

氣又以不時暑不信其物定不長歎依之仰鶴罪別

當僧正隆辨左大臣法印嚴惠等所被行天下泰平

御祈禱也去寬喜二年之夏涼氣如冬天六七兩月

之間霜雪降八月大風是年國土飢饉民間傷死而

今時節不調不可不慎歟

八日丁卯不尾張三郎平頼章卒時章二男

十四日癸酉天晴已剋光物見長五尺餘其體

初者似白鷺後者如赤火其跡如引白布白晝光物

尤可謂奇特雖有本文所見於本朝無其例云又近

國同見云

廿一日庚辰相州姬君嘗魚味御

廿六日乙酉自去夜雷雨今日相州御除服始

今出仕給

廿七日丙戌雨降與州澤門息女宇部宮七郎

卒去之此流產其後煩赤痢病云

廿九日戊子致生會御祭宮供奉入事越州任

例注惣入數申下御點

御點散狀 次第不同

陸奥守 同三郎

武藏守 同太郎

同四郎 同五郎

同八郎 北條六郎

遠江前司 同太郎 相摸右近大夫將監

同次郎 相摸右近大夫將監

陸奥左近大夫將監 同六郎 越後右馬助

同七郎 越後右馬助

刑部少輔 遠江七郎 相摸式部大夫

越後守 駿河四郎

備前三郎

同三郎

足利次郎

上総三郎

同五郎左衛門尉

同次郎左衛門尉

同七郎

武藤少丞

秋田城介

遠江守

三浦介

長井太郎

上野前司

中務權大輔

同三郎

佐渡前司

出羽前司

同三郎左衛門尉

城次郎

同二郎兵衛尉

千葉介

同三郎左衛門尉

同五郎左衛門尉

前太宰少貳

肥後二郎左衛門尉

薩摩七郎左衛門尉

同六郎左衛門尉

狩野五郎左衛門尉

足立太郎左衛門尉

武藤右近將監

同二郎兵衛尉

阿曾沼小次郎

同二郎左衛門尉

茂木左衛門尉

同八郎左衛門尉

常陸二郎左衛門尉

同四郎兵衛尉

和泉五郎左衛門尉

肥後次郎左衛門尉

同太郎

信濃四郎左衛門尉

土肥三郎左衛門尉

同四郎

伊豆太郎左衛門尉

守都宮五郎左衛門尉

常陸太郎左衛門尉

同修理亮

佐竹六郎

山内新左衛門尉

山内藤内左衛門尉

大須賀二郎左衛門尉

同新左衛門尉

紀伊二郎左衛門尉

河越次郎

中山左衛門尉

小山七郎

進三郎左衛門尉

伯耆三郎左衛門尉

同三郎

風早太郎

澁谷左衛門尉

伊東八郎左衛門尉

遠江大炊助

伯耆四郎左衛門尉

相馬次郎兵衛尉

同孫五郎左衛門尉

藥師寺阿波四郎兵衛尉

千葉七郎太郎

淡路又四郎

式部太郎左衛門尉

同兵衛次郎

同二郎左衛門尉

同三郎左衛門尉

同七郎

同四郎

同二郎左衛門尉

和泉前司

伊豆守

小山出羽前司

河内守

日向守

筑前守

同三郎左衛門尉

上総介

同二郎左衛門尉

大隅前司

同太郎左衛門尉

周防守

同修理亮

梶原上野介

同三郎左衛門尉

越中前司

同太郎左衛門尉

同左衛門尉

同左衛門尉



新田參河前司

佐々木壹岐前司

那波左近大夫

同太郎

伊賀前司

後藤壹岐前司

同新左衛門尉

安藝前司

同右近大夫

長門守

伊勢前司

對馬守

大隅前司

縫殿頭

能登右近大夫

同右近藏人

大曾祿二郎左衛門尉

同太郎

周防修理亮

小野寺四郎左衛門尉

同新左衛門尉

伊賀次郎左衛門尉

近立三郎左衛門尉

同三郎

武石四郎

同三郎左衛門尉

淡路五郎左衛門尉

鎌田三郎左衛門尉

大曾祿五郎兵衛尉

押垂左衛門尉

平賀新三郎

遠江十郎左衛門尉

鎌田次郎兵衛尉

内藤肥後三郎左衛門尉

内藤豐後二郎左衛門尉

江戸七郎

小田左衛門尉

常陸二郎兵衛尉

式部八郎兵衛尉

長掃部左衛門尉

同長次郎右衛門尉

内藤肥後六郎

弥四郎左衛門尉

同新衛門尉

七月六

五日 癸巳

尾張右衛門太郎同子息五郎可入

新田參河前司

佐々木壹岐前司

那波左近大夫

同太郎

伊賀前司

後藤壹岐前司

同新左衛門尉

安藝前司

同右近大夫

長門守

伊勢前司

對馬守

大隅前司

縫殿頭

能登右近大夫

同右近藏人

大曾祿二郎左衛門尉

同太郎

周防修理亮

小野寺四郎左衛門尉

同新左衛門尉

伊賀次郎左衛門尉

建立三郎左衛門尉

同三郎

武石四郎

同三郎左衛門尉

淡路五郎左衛門尉

鎌田三郎左衛門尉

大曾祿五郎兵衛尉

押垂左衛門尉

平賀新三郎

遠江十郎左衛門尉

鎌田次郎兵衛尉

内藤肥後三郎左衛門尉

内藤豊後二郎左衛門尉

江戸七郎

小田左衛門尉

常陸二郎兵衛尉

式部八郎兵衛尉

長掃部左衛門尉

同長次郎右衛門尉

内藤肥後六郎

弥四郎左衛門尉

同新衛門尉

七月六

五日

癸巳 尾張右衛門太郎同子息五郎可入

小侍番張之由景頼申沙汰之達小侍云

六日甲午 朝雨辰尅屬霄夕又雨降今日為前

武藏禪室後室禪尼被供養一切經導師若宮別當

僧正隆辨云又六波羅大夫將監長時朝臣室重病

云放生會御出隨兵今日迴散狀是注惣人數申下

御點云今度雖載風記漏

御點人之

武藏太郎

同五郎

同八郎

遠江次郎

出羽三郎左衛門尉

大隅修理亮

周防三郎左衛門尉

越中右衛門尉

阿曾沼小太郎

武石四郎

十三日庚子天晴去六月十四日光物見男山

之由別當申之自仙洞有御尋之處司天等依申不

伺見之由同自石清水令注進其圖云又大官院新

造御所大五條今月三日御移徙兩院同車一負御幸

云

十七日乙巳天晴將軍家御衆山内最明寺此

精舍建立之後始御礼佛也相功可被遂御素禱之

由内々有其沙汰依恩食被餘波歟殊被刷今日御

出行列先隨兵十二人

騎馬

足利太郎兼氏

遠江三郎左衛門尉泰盛

武田八郎信經

小笠原三郎時直

城次郎頼景

下野四郎景經

河越次郎經重 大須賀次郎左衛門尉胤氏

小山出羽前司長村 佐々木對馬守氏信

北条六郎時定 武藏四郎時中

次御車綱代庇

大隅修理亮 出羽三郎左衛門尉行春

相馬二郎兵衛尉胤繼 武石四郎胤氏

小野寺新左衛門尉行通

隱岐二郎左衛門尉時清

山内藤内左衛門尉通重 平賀新三郎惟時

三浦介六郎頼盛 城四郎時盛

周防五郎左衛門尉忠景 出羽七郎行頼

肥後二郎左衛門尉為時 南部又二郎時實

大須賀左衛門四郎朝氏

近江孫四郎左衛門尉泰信 氏家余三經朝

士肥四郎實經 波多野小二郎實經

鎌田次郎兵衛尉行俊

次御劔役人

遠江太郎清時

次御調度役

小野寺四郎左衛門尉通時

次御後供奉次二人 各布衣下括騎馬 武官皆帶弓箭

越後守實時 刑部少輔教時

足利三郎利氏 備前三郎長頼

長井太郎時秀

新田參河前司頼氏

佐々木壹岐前司泰經

和泉前司行方

内藏權頭親家

田勢前司行經

上総介長泰

武藤少弼景頼

筑前二郎左衛門尉行頼

河内三郎左衛門尉祐次

式部太郎左衛門尉光政

出羽次郎左衛門尉行有

和泉三郎左衛門尉行章

上野五郎兵衛尉重光 壹岐新左衛門尉基頼

小田左衛門尉時知 善左衛門尉康長

薩摩七郎左衛門尉祐能

次侍所司

平置左衛門尉實俊

興州相州被候堂前又武藏守遠江前司出羽前司

佐渡前司三浦介等同衆候大夫尉泰清時連等豫

於門外左右搆敷皮御礼佛之後入御干相州御亭

廷尉行忠 布衣冠 衆會此砌有御遊和歌御會等今

日御逗留也

十八日 丙午天晴入夜雨降將軍家自山内還御

御導師左大臣法師嚴惠

廿日 戊申 將軍家有御惱云

廿六日 甲寅天晴 度々變異等事可被行御祈

禱旨可計之由為和泉前司行方清左衛門尉蒲定

等奉行被修諸道仍陰陽師等群案前陰陽權大允  
晴茂朝臣可被行雷公祭由申之天文博士為親朝  
臣申云此条公家之外不聞彼行之例去寬喜三年  
依前武州禪室之仰亡父恭貞行風伯祭翌日風休  
止任其例可被行此祭歟云晴茂朝臣重申云如諸  
國受頒行之例進覽親職自筆狀行方披露之處難  
被決斷之間被問右京權大夫茂範朝臣參河守教  
隆等茂範朝臣申云去寬喜三年被與行彼祭之時  
被尋安賀兩家之處安家者不覺悟之由申之陰陽  
頭賀茂在親朝臣以後憲朝臣勤仕之例奉仕之其  
外例不存知之云教隆真人申云凡人勤仕之例更  
以無所見云依之不可被行之由被定之云

廿九日 丁巳 放生會御祭宮供奉人事廻散狀  
之其狀兩様也所謂一通方各著布衣可供奉之由  
云一通方著直垂可供奉之由云其體雖為兩様於  
散狀者數通書分之被相觸云日來又所催促也其  
中申障之葦相交所謂  
隨兵

島山上野前司

三浦介

小田左衛門尉

土肥三郎左衛門尉

遠江十郎左衛門尉

輕服

直垂

出羽七郎左衛門尉

所勞之由申  
食之由申

足立左衛門四郎

依所勞七月  
十日歸國

周防三部左衛門尉

父周防守著布衣可供奉由進長畢湯六申又左  
流鑄馬射手旁依令見沙汰難察之由申

神馬役事

上野太郎左衛門尉 連奉

弥二郎左衛門尉 稱內之御差進子息新左衛門尉

八月小

六日 甲子 甚雨大風河溝洪水山陀大類毆男

女多橫死

八日 丙寅陰合依去六日大風田園作毛等悉損

亡之由近國申之今日信濃僧正道禪入滅 八年八十

九日 丁卯 武州室所勞減氣之申有沐浴之儀

十二日 己巳 雨降相州御息被加首服号相摸

三郎時利 後改時輔 加冠是利三郎利氏 後改賴氏

十二日 庚午天晴 來十六日競馬役事仰相功

已下諸方被召強力輩此程令習彼藝亦御隨身格

勤等之中被撰堪能者爰左右事秦弘負種久行久

等頻申子細而侍與隨身如馬打之相論雖有子細

任院御例以侍可為左之由被定

十三日 辛未 明後日御樂宮供奉人等之中帶

叙者依有故障之帶重相催之

近江孫四郎左衛門尉 山内三郎左衛門尉

十平賀新三郎 已上三人進奉  
阿曾沼五郎 大曾林左衛門太郎

阿曾... 已上二人申障云...

十五日癸酉 小雨降北風烈今日鶴屋八幡宮

放生會將軍家御出門山内三郎左衛門尉

先檢非違使三人山内三郎左衛門尉

十佐々木隱岐大夫判官泰清山内三郎左衛門尉

三浦遠江大夫判官時連信濃判官行忠

次先陣隨兵十人山内三郎左衛門尉

三浦遠江三郎左衛門尉泰盛山内三郎左衛門尉

相馬弥五郎左衛門尉胤村山内三郎左衛門尉

十佐渡五郎左衛門基隆山内三郎左衛門尉

三出羽次郎左衛門尉行有山内三郎左衛門尉

十上總太郎兵衛尉長經武藏次郎兵衛尉賴泰

河越四郎經重和泉三郎左衛門尉行章

備前三郎長經足利次郎兼氏

次先駟八人山内三郎左衛門尉

次殿上人十人山内三郎左衛門尉

次御車山内三郎左衛門尉

善次郎左衛門尉康有山内三郎左衛門尉

隱岐次郎左衛門尉時清山内三郎左衛門尉

後藤壹岐新左衛門尉基頼山内三郎左衛門尉

内藤肥後六郎左衛門尉時景山内三郎左衛門尉

近江弥四郎左衛門尉泰信山内三郎左衛門尉

山内三郎左衛門尉通廣山内三郎左衛門尉

鎌田三郎左衛門尉義長



大須賀左衛門四郎朝氏

肥後四郎兵衛尉行定

鎌田次郎兵衛尉行俊 平賀新三郎惟時

以上著直垂帶劔候御車左右

御劔役人

刑部少輔教時

御調度役

小野寺四郎左衛門尉通時

次御後

五位十五人 布衣下拵

越後守實時

越後右馬助時親

中務權大輔家氏

出羽前司行義

後藤壹岐前司基政 佐々木壹岐前司泰經

三河前司賴氏 那波左近大夫政茂

和泉前司行方 越中前司賴業

周防前司忠經 伊勢前司行經

上總介長泰 對馬守氏信

武藏少卿景賴

六位十人 布衣下拵

足利上總三郎滿氏 長井太郎時秀

式部太郎左衛門尉光政

伊賀次郎左衛門尉光房

薩摩七郎左衛門尉祐能

大曾祢次郎左衛門尉盛經

鏡前次郎左衛門尉行賴

善右衛門尉康長 小野寺新左衛門尉行通

善弥太郎左衛門尉

次後陣隨兵十人

遠江七郎時基 武藏四郎時仲

六上野五郎兵衛尉重光

足立太郎左衛門尉直元

常陸次郎兵衛尉行雄

武石三郎左衛門尉朝胤

伯耆新左衛門尉清經

河内三郎左衛門尉祐次

城次郎賴景 大須賀次郎左衛門尉胤氏

御奉幣之後於迴廊覽舞樂其結構異例年陸奧守

被候其所此外豆前司賴定前大宰少貳為佐出

羽前司行義刑部大輔入道成獻常陸入道行日等

同參加申尅還御之後六波羅飛脚系著前將軍

入道前大納言家去十一日依御痢病薨御之由申

之 十六日 甲戌陰 將軍家御出流鏑馬射手已下

役殊被撰其人所謂相摸三郎時利陸奧六郎義政

足利三郎利氏武藏五郎時忠三浦介六郎賴成等

為其最又競馬五番

左近持富所左衛門尉

一考

右村平跡三郎

三處之後右好而在外空馳及數度左追表手前取合落馬富所自額血出

左 當麻右馬五郎

二番

右追勝 檢伏三郎

左先出互相競各空馳二度右追下手無程馳追當麻擬取鞅合取拔畢

左進持 下条四郎

三番

右 秦弘負

下条追之暫不得相並但於勝負拂內取

是許

之弘負離馬懷共落馬而左勝之由雖有

沙汰右頻申子細祿畢

左進持 澁谷右衛門三郎

四番

右 秦種久

右先出之遲之間左追之即取之拂脇種及離馬取澁谷腰共落馬左顯勇力右存

故實太有其真

左追勝 烏子左衛門次郎

五番

右 秦行久

右先出空馳度之左追之行久不合鞭止

畢是怖為子之勇力之故也

廿日 戊寅 新奧州元前右馬 奉執權事之後將

軍家始可有入御于彼御常業別業之由日來有其

砂汰治定既依可為來廿三日今日披催供奉入其

散狀披覽之後於御前故障之替已下有被相加事

足利次郎

遠江次郎

佐渡五郎左衛門尉

可催加之者

常陸次郎兵衛尉

申所勞之由以善次郎左衛門尉可為其替者

廿三日 辛巳天晴

將軍家入御于新奧以常業

第已刻御出

御求干

御馬 谷古衛門三

供奉入

御求干 谷古衛門三

步行

御求干 谷古衛門三

御

御求干 谷古衛門三

備前三郎長賴

城四郎時盛

佐渡五郎左衛門尉基隆

味泉

式部太郎左衛門尉光政

新奧

常陸次郎左衛門尉行雄

新奧

薩摩七郎左衛門尉祐能

新奧

武藤右近將監垂賴 和泉二郎左衛門尉行章

武藤二郎左衛門尉賴泰

後藤壹岐新左衛門尉基賴

小野寺新左衛門尉通行

隱岐三郎左衛門尉時清

善二郎左衛門尉康有

鎌田三郎左衛門尉義長

土肥左衛門四郎實經

鎌田二郎左衛門尉行俊

騎馬

土御門中納言顯方孫

花山院宰相中將長雅卿兼武藏守長時

越後守實時刑部少輔教時

尾張左近大夫將監公時足利二郎兼氏

同三郎賴氏陸奥七郎業時

武藏五郎時忠和泉前司行方

長井太郎時秀三河前司賴氏

佐々木壹岐前司泰經後藤壹岐前司基政

筑前今司行泰

上總介長泰

武藤少卿景賴

城次郎賴景

出羽三郎左衛門尉行資

下野四郎景經

陸奥入道奥州 相州 尾張前司 出羽前司

等豫候波亭先入御出居其所立衣架被褥御服半

尻狩御衣浮泉綾御水干袴也白青 色々御小袖十

具御帷五等也御棚居八合菓子又卷絹三十疋紺

布三十擅紙百帖扇五十本積廣蓋次供御立大本次

供盃酒三献之後渡御泉坐以金銀以下作屋形船

金五兩色々御帷三十疋第一端具一也 彼置此所

次女房一条燈近衛殿別當殿新右衛門督局兵衛

督局小督局右衛門佐局兼濃局等樂上及晚被奉

御引出物刑部少輔教時持樂御叙計作金五十兩  
置銀陸奧七郎葉時役之南廷五置銀足利三郎利  
氏持樂之次御馬二疋

一御馬置銀陸奧三郎時村

式部太郎左衛門尉光政

二御馬 出羽三郎左衛門尉義賢

同七郎行賴等引之

女房贈物衣今木小袖帷等也御共侍各香行騰也

廿四日 壬午霽 將軍家御惱與州相州已下群

衆

廿六日 甲申陰 御惱增氣之間若官別當僧正

隆辨修不動護摩又於御所波行泰山府君祭晴茂

朝臣奉仕之出羽前司行義為奉行

廿九日 丁亥 終夜雨降依御惱事重有御祈大

土公資俊靈氣泰繼四角宣賢晴長晴秀晴成四堺

晴尚親貞維行重氏等也

九月大

一日 戊子霽 將軍家御惱赤斑瘡也若官別當

僧正衆籠官寺致御祈禱此事當時流布諸人不免

之為祈禱於諸堂披行百座仁王講清左衛門尉滿

定奉行之

三日 庚寅天晴 又有御惱御祈等松殿法印良

基左大臣法印嚴惠各修藥師護摩七座泰山府君

宣賢為親晴長席資以平晴憲晴宗此外披行七座

靈所被天曹地府御當年星祀相等祭  
十日丁酉於相州第被轉讀大般若經云  
十五日庚壬寅陰相州令相赤斑瘡給  
十六日癸卯朝間雨降及晚相州御不例事去  
六月廿六日當御衰日始今出仕給之間今御不例  
可有其慎之由陰陽道勘申之仍被行泰山府君祭  
又相州女子有赤斑瘡邪氣相交云  
十九日丙午甚雨降申剋將軍家御沐浴陰陽  
少允晴宗候御身固陰陽醫師權侍醫長世賜祿中  
御門少將公仲朝臣取御衣五單御劍金作等次給  
御馬式部太郎左衛門尉光政引之於東屏中門之  
內此儀今日武州嫡男四歲赤斑瘡云

伏五日壬子陰相州御不例平愈之間始令洗  
手足給此中疑刻問下齊神刻明否由云云  
廿八日乙卯越後守室赤斑瘡所勞云  
廿九日丙辰天晴相州御沐浴  
卅日丁巳陰民部大夫康連依病痢危急辭問  
注所執事子息康宗補其闕  
十月大  
二月己未天晴大波羅龜脚參著去月廿七日  
四宮惟王尊薨御又廿四日前將軍三位中將家御早  
世之由申云  
三日正庚申天晴八散位從五位上三善朝臣康連  
卒年六十

九日 丙寅 天晴 南風入夜雨降改元詔書到  
來去五日改建長八年為康元今年同日相國御息  
女遷化云

十三日 丙辰 相州姬君卒去日來有御祈禱日  
光法印尊家被修變捺王供法印清尊為千手阿闍  
梨兼驗者各有事已後破壇退出云

廿三日 庚辰 右近大夫將監時定朝臣依素懷  
遂出家云

廿六日 癸未 天晴 依四宮御事并相州輕服三  
嶋御神事已下皆被停止之為大宰權少貳景賴奉  
行召參河守教隆破問可有御除服否申云彼官御  
年三歲也七歲以前無重輕服仍被止此儀云

廿九日 丙戌 天晴 貢馬御覽與州已下數輩出

仕云

十一月大

二日 己丑 陰 六波羅飛脚參著去月廿七  
日遷化院御將軍家御輕服仍所被閣政務也七

三日 庚寅 相州令煩赤痢病給三流酒為云

十一日 戊戌 天晴 成刻將軍家有御除服之儀  
天文博士為親朝臣東帶勳御被六角侍從之為陪

膳源式部大史親行僕役送太宰權少貳景賴奉行

十八日 乙巳 陰 申剋雨降雷鳴數聲



廿二日 巳酉 相州赤痢病事減氣云今日被讓  
執權於武州長時又武藏國務侍別當弁錄官第內  
同被預甲之但家督幼稚程之暇代也  
廿三日 庚戌 天晴 寅越於最明寺相州令落餘  
給年依日來素懷也御法名覺了房道崇云御戒師  
宋朝道隆禪師也依此事名家兄弟三流既為沙弥  
希代珍事也所謂前大藏權少輔朝廣法名信佛上  
野四郎左衛門尉時光法名同十郎朝村法名結城  
名元弟 遠江守光盛法名三浦介盛時法名大夫判  
官時連法名三浦各兄弟以上前院前守行泰法名行善前  
伊勢守法名行顯 信濃判官行忠法名行一以上信濃彼  
面々有所慕年來無貳斯時思名殘之餘忽顯此志

云但得被行自由之過可止出仕之由云

廿四日 辛亥 武州奉執權事之後始被樂政所  
與州并評定衆等各布衣樂會  
廿六日 癸丑 夕雨降寅刻名越燒亡備前三郎  
長賴亭災哭不及他所  
廿八日 乙卯 陰 小雨洒今日評定武州始出仕  
給申剋前佐渡守正五位下藤原朝臣基經卒年七十六  
廿日 丁巳 天晴 最明寺禪室令始行遷修給

十二月小

十一日 戊辰 天晴 亥刻在大將家法華堂前燒  
亡北風烈吹勝長壽院并弥勒堂五佛堂塔悉以火  
但本尊及一切經等希有而奉取出之云

十三日 庚午 明春正月御的始射等被差定之被下御教書越後守奉行也

十九日 丙子 天晴 戌刻雷鳴數聲

廿月 丁丑 就六波羅同注条々有被仰遣事

一 日可被書同者署所事

一 兩方所進證文等各可對繼目事

一 同文書目祿巨細可被注進事

一 莊園領家事

雖被載本寺社之名不被注領家之間聊涉不

審問注記端作雖不被出之申詞之注ナシニ

可被書載之數

一 可書正地頭交名事

其庄地頭 某土 載 天 不書正地頭之間聊涉不審  
地頭 某代官 某土 正負代官共以可被書之矣

一 条々各別可立篇目事

一段内條々相交之間御念々之時難得御心

一 事一段 仁天 兩方申狀詞別々 仁 可被書加

也

一 以問注記下沙汰人令勘理非之處甚數輩之中

於緣者々令起其座畢而其外或号先論入又稱前

々縁者嫌申沙汰人之事御評定之時用捨何様被

定作覽不審事候之間内々尋申候委可愛仰候焉

廿五月 壬午 小侍所番帳事有其沙汰於廂等

近々事者於御前直宜有御計小侍所者本所也為

愬入數事之間殊可紕父祖之經歷三代不例其人  
 數者雖為勤役公事之御家人輒不可有御許容之  
 旨被定之

新刊吾妻鏡卷第四十六

此段係外傳之類正良外傳也以西陽宮之  
其宮出銀書上簿天不書五

此節腰骨為圓者大則以下之故緊太過小則以下

六寸則為以下至地骨長三寸上節頭又大會為圓

之則去內踝骨不遠故脈則以下至附鼻則長一尺

長相同必并及之足面大附附者自內踝以前而

寸脈形上脈後曲如為脈脈在前脈在後因至下

下至內踝骨長一尺三寸內骨以下至址僅長

在外高以踝骨而在內為內骨也內輔骨以下那

大尺廣長三寸半內踝骨在跟前兩旁知骨

此節腰骨為圓者大則以下之故緊太過小則以下

六寸則為以下至地骨長三寸上節頭又大會為圓